

医人伝

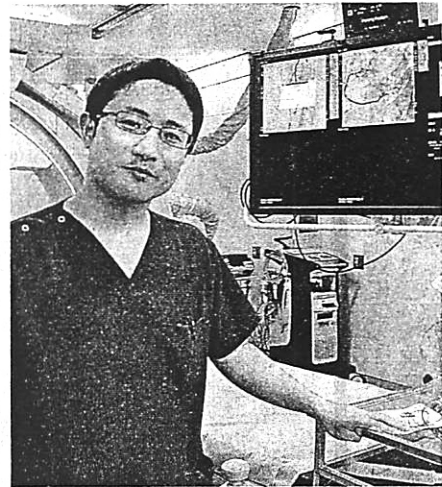
血管造影装置の大きなモニター画面に、血液の流れが映し出される。八十代の大動脈弁狭窄症の男性だ。それを眺めながら、山本さんは太ももの血管から入れたカテーテルを患部に向けて動かしていく。

三月初めに、名古屋ハートセンター(名古屋市東区)で行われた名古屋地区初のTAVI(経カテーテル大動脈弁留置術)。昨年二月から、兼務する豊橋ハートセンター(愛知県豊橋市)で約五十例の実績を持つ山本さんが執刀医を務めた。

カテーテルには、折り畳んだ生体弁が入っており、大動脈の狭くなった部分に留置して、弁が正常に動くようにする。手術室の大きな窓の外は、見学する医師らで黒山の人だかり。チームは、伊藤立也統括部長らそうそうたるメンバー。「緊張したけど、経験があった分、落ち着いてできました」と振り返る。

豊橋ハートセンター (愛知県豊橋市)

循環器内科医 **山本 真功**さん (37)



ハイブリッド手術室でTAVIの説明をする山本真功さん

三重県熊野市生まれ。日本医大に進み、循環器内科を志した。「これから活躍できる場が広がりで、一人の患者さんの治療全体にかかわれることに魅力を感じた」という。恩師の勧めでフランスのパリ大学付属アンリーモンドール病院に留学し、TAVIの技術を学んだ。帰国後、母校に戻ったが、心臓カテーテルの分野で有名な豊橋ハートセンターから誘いがあり「高い水準の治療ができそう」と選んだ。

TAVIは二〇一三年十月に保険適用されたが、実施施設は

全国でまだ五十二カ所。外科手術とカテーテル治療の双方に対応したハイブリッド手術室を持ち、循環器内科医と心臓外科医を含めた「ハートチーム」があるのが条件だ。

大動脈弁狭窄症は外科手術により治療できるが、体力の落ちた高齢者には難しい場合もあった。手術が成功しても、入院に患者が弱ってしまうことも。開胸しないTAVIは、体の負担が格段に少ない。

しかし、血管がもろくなった高齢者は不測の事態が付きまとい「連携の質が成績を左右する」と強く感じているという。患者さんの状態をもとに方針を立て、カテーテル操作に慣れた内科医、緊急の出血などに即応できる外科医が、お互いの力量を認め合ってこそ、チームワークが高まるからだ。

豊橋と名古屋の仕事を掛け持ちして大変だが、休日は三人の子どもと遊ぶのが一番の楽しみ。(編集委員・安藤明夫)

「TAVI」普及に意欲